

日本災害情報学会「廣井賞」

(廣井賞表彰審査委員会幹事 岩田孝仁)

2013 年授賞式・受賞記念講演 2013 年 10 月 27 日 群馬県桐生市市民文化会館

1. 受賞者

災害情報分野で著しい功績のあった会員又は会員所属団体等を表彰する「廣井賞」の 2013 年授賞式・受賞記念講演が 2013 年 10 月 27 日に群馬県の桐生市市民文化会館で行われた。社会的功績分野では岩手日報社と朝日放送報道局が、新しく創設した特別功績分野には学会運営の基礎を築いた事務局長の中村信郎氏が選ばれ、賞状と賞牌が授与された。

◆社会的功績分野

「追悼特集 “忘れない”」: (株) 岩手日報社

岩手県内の東日本大震災の犠牲者全員を対象とした追悼特集「忘れない」は、災害報道の新たな取り組みとして高く評価され、さらに、追跡調査の結果をデータベース化し被災者が置かれた状況を分析する手法は、「震災犠牲者のおよそ 2 割が災害弱者を支援していて被災した」という新たな発見につながるなど、震災報道の枠を超え、学術研究結果としても貴重なものと評価される。

◆社会的功績分野

「古文書が語る巨大津波 “シリーズ”

朝日放送 (株) 報道局

東日本大震災を機に始めた「古文書が語る巨大津波」シリーズの番組制作を通じて、「古文書」という市民になじみの少ない情報を視覚化し、「歴史地震」や「歴史津波」を分かりやすく伝えることに成功した。

この一連の番組は学校などの防災教育の教材に活用されるなど、放送以外の面でも高く評価されており、このシリーズが引き続き積み重ねられることが期待される。

◆特別功績分野

日本災害情報学会事務局長 中村信郎

本学会設立直後から十年以上の永きにわたり事務局として学会運営に参画し、特に会員も少なく運営も厳しい設立初期には無報酬で学会活動を支え、学会発展に尽くし日本有数の学会に育て上げてきた功績は非常に大きい。

2. 授賞式

河田恵昭会長の挨拶に続き、廣井賞表彰審査委員会の藤吉洋一郎委員長から選考の過程と受賞者の紹介が、入江さやか氏の軽快な司会進行で行われた。



3. 受賞記念講演

(1) 「追悼特集 “忘れない”」

(株) 岩手日報社 編集局報道部次長 磯崎真澄

この度は、栄えある廣井賞をいただき誠にありがとうございます。身の引き締まる思いで、「東日本大震災・被災現地の報道機関として、防災・減災に取り組まなければならない」との思いを新たにしております。

企画「忘れない」

はじめに、企画「忘れない」は、津波で亡くなられた方々の生前の姿を記録し「二度と津波で人が死なないまちづくり」を目指す特集で、岩手県内の死者・行方不明者の約 5,800 人のうち、これまでに 3,313 人をご紹介します。

企画のきっかけは、東日本大震災後、沿岸地域の支局長と本社・震災取材班で、定期的に行っている支局長会議の席上でした。会議は、現場で何が問題になっているかを話し合い、紙面作りを検討するものですが、「忘れない」はその中で、提案されました。2011 年の初秋だったと思います。提案は、「被災地に寄り添う報道を行うために、毎日、数人ずつでも、犠牲者を取り上げていきたい。10 年たっても終わらないかもしれないけど、それが被災地に寄り添うということでしょう」というものだったと記憶します。検討の結果、「10 年経てば、亡くなる遺族も多いだろう。次の 3・11 の紙面で、まず、出来る限り紹介しよう」ということになりました。



「忘れない」取材

「忘れない」の取材では、質問用紙を手に、記者が遺族を訪問します。まず、家族に当たり、一家全滅の場合は親族や知人らに話を伺います。掲載にあたっては、喪主から了解が得られたものに限っています。企画の趣旨は、犠牲者一人ひとりの「生きた証し」を記録することです。紙面上は、生前の人柄や、思い出、仕事のこと、地域活動など半生を中心に、生前の姿を忍ぶ内容になっています。亡くなられた方々を思い、一人ひとりが地域に存在したことを忘却の彼方に押しやらないように、読者の記憶に刻む内容です。

一方で、「生きた証し」とは、決して「生前の人柄・行い」だけではありません。彼らの「無念の死」も「生きた証し」と考えています。「なぜ逃げ切れなかったのか」「どこで犠牲になったのか」を探ることは、今後、津波の犠牲者を減らすことにつながります。調査分析により、未来への遺言となると考えています。

取材はまず、仮設住宅など、ご遺族の自宅のドアをたたきるところから始まります。取材の趣旨を説明し、理解が得られれば、お話を伺います。遺族の心情を第一に、無理強いせず、断られたときには、気持ちが落ち着いた時を見計らい再度訪問するようにしました。

「失礼な奴だ」とドアをピシャリと閉められ、門前払いされることも多々ありました。木枯らしが吹く仮設住宅、雪の降りしきる峠道を越え、沿岸地域を記者たちは歩きました。また、遺族を求め、北は北海道から、南は沖縄まで記者を派遣。これまで、70人以上が、この取材に携わりました。

玄関で話を聞き、遺影を複写させていただきます。津波で全て流され、写真が一枚も手元に残っていないご遺族もいます。そのような中で、家に上げてくれる方も少なくありません。仏壇に手を合わせ、取材項目に従いお話を伺っていくうちに、涙するご遺族も多く、紙面的には十数行の記事ですが、取材時間が1時間、2時間となることも希ではありません。傾聴ボランティア的な部分も感じました。夫を亡くした高齢の妻、子どもを亡くした母親、家族同然の弟一家を失った兄とその娘など、淡々と、言葉を詰まらせながらのお話に、私たちも、胸が苦しく、一緒に泣きながら—ということも一度や二度ではありません。

そのような悲しみの中にある人々に、亡くなられた状況や場所、遺体の発見場所を聞く作業は、正直に言って、楽しいものではありません。語りたがらないご遺族も多い。そのため、これまで3313人の犠牲者を紹介してきましたが、すべての方々について、データがそろったわけではありません。しかし、その点を聞かなければ、死者に報いることは道半ばとなってしまいます。厳しい取材が続きましたが、この取材で、若手が育ったことも確かです。

調査報道

そのような中で、集められた情報をデータベース化することにより、私たちは2度の調査報道を行うことが出来ました。

2012年の第1回調査では、テキスト情報を整理し約1,500人分の遭難状況や場所をカテゴライズし分析しました。結果として、犠牲者の40%が「逃げないで遭難」していること、44.9%が自宅で遭難したこと、半数にあたる49.3%の方が70代以上であること—など、犠牲者の傾向が「調査による実数」として目に見えてきました。典型的な事例をピックアップし、再取材で、それぞれのエピソードをデータ分析とともに紹介し、読者の防災意識の向上に努めました。

この第1回調査で、気になったことがあります。「避難後、家に戻った」や「避難途中」などの中に「年老いた両親を迎えに行った」とか、「親や孫のために防寒着や布団を取りに行った」というものが散見されます。また、「自宅にいて逃げなかった」という人の中には「高齢者や幼児の薬や衣類を用意していた」とか「寝たきりの父や母に付き添っていた」という方々もいる。これとは別に、「浸水域外にいた息子が、自宅で寝たきりの親を迎えに行ったら、親は近所の人に避難させてもらっていた後で、息子だけが犠牲になった」という例もありました。このようなことから、「災害時要援護者の避難支援に当たった人」、つまり、「災害時要援護者周辺の人」が犠牲になっている確率が高いのではないかと考えるようになりました。推察はされているものの、はっきりとしたデータとしては表に出ていない。「忘れない」を基にすれば、もしかしたら、ある程度の数字が出るのではないかと考えました。

この場合、災害時要援護者とその支援について、広く解釈しました。その方が現実に即した形になると考えたためです。「支援」は、「迎えに行く」「担いで逃げる」などの「救助」に関わる積極的なものに限定せず、「日常の中の支援」、例えば、先にお話したような「防寒着を取りに家に戻る」とか「高齢者や幼児の避難準備を行う」などを入れました。また、「支援従事者」の面でも、「消防、警察、行政、自主防災組織」といった枠を超え、家族や近隣住民を含めることにしました。

今年の1～2月に行った再調査では、この点を明らかにすることを目的としました。人数を1,083人に絞り再び遺族を訪問。以前はテキストデータからの読み取りだったので、質問項目を体系化しました。その結果は、約2割にあたる18.9%の人が災害時要援護者の支援中に津波にのまれていることが推測されました。人数にすると、岩手県の犠牲者約5,800人のうち、1,000人強。その人数の多さが実感できます。

また、この1,000人の犠牲者の90.2%の人は、家族や近隣住民など、支援業務従事者といわれる人ではありません。この方々は、「みんなが津波から逃げている

ことを信じ、自分も逃げる」いわゆる「津波てんでんこ」をしようと思えば助かった人、死ななくても済んだ人と言えます。しかし、体が不自由な親を置き去りに逃げるなど出来るのかと自問自答してしまいます。たぶん、答えはNOでしょう。それでは、どうすればいいのか。

一方で、犠牲者の中で災害時要援護者は16.1%、支援に当たった方々と合わせると、実に35%、岩手県の犠牲者の2,000人強が災害時要援護者とその周辺の人々だったと推計できます。とても大きな数に思えました。また、行政や警察、消防団などの組織は、ルールを作ることで被災を免れることが出来ますが、一般市民に、そのルール作りはありません。これらの点は「二度と津波で人が死なないまちづくり」を考える上では、見逃せないファクターです。被災三県は、今後のまちづくりに生かすとして、南海トラフ地震を控えた、現在、従来のまちの中で対策を練らなければならない地域の方々にも、急務の事案であることを訴えられないかと考え、今大会で、口頭発表をさせていただきました。

再調査では、このほか、災害時要援護者とは別に、他者の支援にあたり犠牲となった方々が約30%、避難所で亡くなった方の多くが高い防災意識を持つ人だったこと、地震後すぐに逃げずに被災した方々が約70%だったことなどが確認できました。予稿集にありますので目を通していただければ幸いです。

また、「忘れない」取材を行う上で、感じるがあります。それは、遺族の取材力です。調査に当たり「遺族が話す死者・行方不明者の遭難状況は正確なのか」との疑問を良く持たれます。死者に直接聞くことは出来ませんので、調査結果は推計の域を脱することは不可能だと考えます。しかし、ご遺族は、「亡くなった家族の最後」を追い求めています。近所の住民に聞くことはもちろん、最後に一緒にいたと思われる人、ちょっとでも見かけた人を探して話を聞くなど、足取りを追い、情報を集めています。

山田町南部に住む高齢女性は、同居していた、高校を卒業したばかりの孫を亡くしました。震災当日、彼女は友人と買い物をするために、車で50分ほどの宮古市に列車で向かっています。遺体が発見されたのは、買い物をしたと思われる商業ビルから20分ほどの海岸。義理の姉が足取りを追いました。最後の目撃情報は宮古市内の商業ビル。遺体の発見場所周辺に線路はありませんが、すべての駅を回り、駅関係者や周辺住民にあたり、目撃情報を求めました。その後、誰かの車に乗せられ、商業ビルを後にした一との話が入ったといい、海岸沿いの主要国道を移動中に波にのまれたのだろう一との結論に至りました。このようなご遺族の皆さんは「どう亡くなったか分かなければ、区切りが付かない」とか「看取ってもやれなかった、突然にいなくなったのだから、最後を確認してやらないと、亡くなった本人も浮かばれない

でしょ」と話してくれました。

確かに、伝聞の情報ですが、遺族が苦労して行う「取材」、また、最後の目撃情報や、散歩など日常の行動と遺体発見場所の位置関係など、遺族の話す犠牲者の遭難状況は、かなり確度が高いと感じております。

答えは現場に、犠牲者の声が「二度と津波で人が死なないまちづくり」に

今回の「忘れない」の企画も、調査報道も、全ては「現場」から始まっています。東日本大震災・被災現地の新聞社として、この現場から目をそらすことは出来ないことです。現場・被災地で被災者の声を聞く一その中に被災地の全ての問題があり、解決策はそこから考えていくことが必要だと、今回の調査報道を通してあらためて感じました。「死者の声」に耳を傾けること、これも「答えは現場に」の一つです。

「どうして犠牲になったのか」、「どこで犠牲になったのか」一をつぶさに分析することが、想定もされている次の巨大津波で「人が死なない」、「犠牲者を1人でも少なく」することにつながると確信しています。そして、それが、彼らの身を持って示した教訓であり、遺言であると感じるのです。繰り返しになりますが、犠牲者の無念の死を「二度と津波で人が死なないまちづくり」で報いることが私たちの使命と感じております。また、ここで分かった内容が、今後の防災・減災の活動に少しでも役に立てばと願っております。

最後になりましたが、授賞に際し「忘れない」の取材と調査にご協力いただいた皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

（2）『古文書が語る巨大津波“シリーズ”』

朝日放送（株）報道局 木戸崇之

このたびは、私どもの番組、そしてそれに関連する活動に対し、栄えある賞を頂き誠にありがとうございます。災害情報を専門とする学会の皆様からの評価は、この番組の価値を大きく高めることにつながると、うれしく思っております。また、番組制作にあたりまして、災害情報学会に所属の先生方からも、多大なるご協力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

番組制作のきっかけ

今回賞をいただきました「古文書が語る巨大津波」「天下人が恐れた大地震」は、2011年の東日本大震災を機に、私たちが知らない、また知るよしもない時代の歴史災害から、将来の災害に向けた教訓を学ぼうというものです。95年の阪神淡路大震災以降には、そのような機運はあまり感じられなかったのですが、今回の地震では、1000年前の貞観地震とその津波の災害が指摘されたのを受けて、その他の歴史災害からも、教訓を得られるはずだということで、番組制作を思い至りました。

私は、関西で文化財担当記者をしており、正倉院や古事記、古代の遺跡発掘現場などのトピックを担当していました。東日本大震災が発生し、遠く離れた関西で、文化財担当記者として何をすべきか悩んだ末の企画提案が、この企画でした。「数百年という時間の感覚」を扱うのに慣れていたからこそ、手がけることができた番組と言えるかもしれません。不幸な出来事がきっかけではありますが、この巡り合わせに感謝しております。



危うくなってきた地域の災害伝承

「災害は忘れたころにやってくる」という言葉があります。物理学者の寺田寅彦さんの言葉です。しかし、「忘れたころ」というのがいったい、どの程度の時間の経過を意味するのか。「ひとつ大きな災害があつて、数年経って、その記憶が薄れた頃に、次の災害が別の場所で起こる」という認識が一般的ですが、それは違うのではないかと思います。先祖代々同じ場所に住んでいて、「大変なめにあつた」と語り継がれる大きな災害があつたとします。その災害の記憶が、子孫に語り継がれなくなった頃に、次の同じような災害が起こる。「人ひとりの記憶」というような短いスパンではなく、歴史災害のレベルを言っているのだということに気づいたのです。

しかし、その「伝承」すら、もはや危うい状況です。国立社会保障・人口研究所の人口移動調査の、引っ越し経験に関するデータを見ると、生まれてから、ずっと同じ場所に住んでいる人の割合は、引っ越し経験のない子どもを除きますと、わずか5%程度しかいないのがわかります。災害が起こった際の意識として、自分が住んでいる場所がどういう場所なのかを知ることは重要ですが、ほとんどの日本人は、先祖から災害伝承や被災経験を蓄積することのできない「見知らぬ場所」に住んでいます。昔は「忘れた頃にやってきた災害」が、今は「いつ起っても何も知らない災害」になっているのです。

私も同じです。私が生まれ育ったのは、9月16日の台風で避難指示が出た京都市伏見区向島です。今回受賞した「天下人が恐れた大地震」でも触れましたが、この向島は、太閤秀吉の伏見築城でできた埋め立て地、お城の

向かいの島で向島です。元は巨椋池という大きな池でしたが、城に船をつけるために、秀吉が太閤堤と言う巨大な堤防を作らせ、宇治川の流れを固定したことによって人が住める場所になりました。それから400年。もともと水害常習地だったはずですが、私が住んでいた25年間、巨大な堤防のおかげで水害は一度もありませんでした。結婚してから引っ越してきた両親も前の水害を知りません。そして今、私は奈良県天理市に住んでいます。今回の台風で避難指示が出た経験すら、私や私の家族には、あまり参考になりません。

私のふるさとの小さな話ではありません。私が仕事をしている大阪も、秀吉が町人たちを城下に住まわせるために、400年前に作った埋め立て地です。「古文書が語る巨大津波」では、「太平記」の記述をもとに、大阪に押し寄せた津波の様子をアニメーションで再現しました。もともと海に沈んでいた場所ですから、津波はくるわ、液状化は起こるわ、高潮はあるわ、洪水にはなるわという、本当は住んではいけない場所です。それが国内で2番目の大都市になり、日本一の地下街まで作って、不都合な事実は意識せずに暮らしています。万が一のことなど、ほぼ想像していないと言ってもいいでしょう。

マスメディアの使命として起こる前に啓発を

先祖から子孫への災害伝承が機能しなくなった今、先祖に代わって、それを住民に示せるかどうか、私たち「メディア」の課題です。しかしテレビは、災害において求められる自分の役割を見失っているような気がします。テレビの仕事をしてながら考えることがあります。テレビは「起こったこと」を伝えるのは得意です。でも、伝えたときにはすでに災害は起こってしまっていて、手遅れです。また、阪神淡路の頃は、被災者の安否情報や、ライフライン情報を流す役割もテレビが担っていましたが、その後普及したインターネットに、もはややかなうべくもありません。

「起こる前」に啓発すること。いざというときにひとりでも多くの命を救おうと思えば、これこそ、本来マスメディアがやらなければならないことですが、これは苦手です。やり方には工夫が必要になりますが、今回のような、歴史を活用した防災啓発番組は、その方法のひとつだと思います。

よそで起こったことは、しょせん「他人事」です。自分のこととして想像してもらうためには「今生活しているこの場所が、こんなふうになってしまう」とはっきり示すのが一番の近道です。この川がこんなふうにあふれる。この地面がこんなふう液状化する。この斜面がこんなふう崩れる。この地下街がこんなふう浸水する。この町がこんなふう倒れて火事になる。その状況をわかりやすく映像化する。

無責任に作るわけではありません。歴史災害を研究している先生方の研究成果を踏まえて、検証をしつつ映像

化します。怖がらせるために映像を作るのではなく、災害を想像できるようにすることを意識すべきだと思います。

「防災番組です」とかしこまって始めると、視聴者は「またか…」と感じます。地元の歴史を学ぶうちに、気がつけば「防災」という出口から出ていたというやり方が、普段の防災意識向上につながればいいなと考えています。

幸い、災害情報学会は、災害を研究する先生方と、私たちメディアの人間との接点となっていていただいています。是非、防災に向けた皆さんの最先端の研究を、広く市民に伝承するツールとして、私たちを利用いただければ嬉しく存じます。そのために「まだ起こっていない災害、目撃していない災害を、冷静にビジュアル化」できるように、腕を磨いておきたいと思いますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（３）「御礼 日本災害情報学会」

日本災害情報学会事務局長 中村信郎

まず、廣井賞表彰審査委員会の委員の皆さんの粋なはからいに感謝します。

私は学会のホームページを、息子に「覚えが悪い」と叱られながら更新しているのですが、廣井賞の幹事の静岡県の岩田さんから、廣井賞が決まったから学会ホームページにアップして欲しいと連絡を受けてアップしたら、なんと私の名前がありました。びっくりしました。いま国会に上程されようとしている特定秘密保護法案の先取りではないかと思われるほど、事務局長の私に秘密裏に選考をやっていたようです。で、家に帰って妻に「お手盛りようで嫌だな」と言いましたら、妻に「パパは頑張ったのだから廣井先生が一番喜んでくれていると思いますよ」と言われ、廣井賞表彰審査委員の皆さんの粋なはからいに感謝し、敬愛する廣井先生の賞をありがたくいただくことにしました。普段は皆さんと同じようにそちらの席で廣井賞の式を見ているのですが、今回、河田会長から賞状をいただくとき、ウルウルするものがありました。ありがとうございました。

学会創立時はただの会員でした。

1999年4月24日、東京・半蔵門会館で創立大会が開かれました。この写真がそのときのものです。左が初代会長の廣井先生、その隣が副会長のNHKの伊藤さん、挨拶しているのがきょうまで会長の河田先生、その隣が二代目会長の阿部先生です。この3人だけではないのですが、3人が中心になって学会を立ち上げました。そのとき私はただの会員で、そちら側に座っていて、学会の創立大会というのはこうやってやるのかと、興味深く見て

いました。



創立時に裏方で頑張って汗をかいたのは先ほど総会の司会をしていた松尾さんです。松尾さんは当時、建設技術研究所の何とか部長をしていました。いまはNP0の環境防災総合政策研究機構、通称CeMIの理事をしています。松尾さんは3.11のとき、東北の消防団が多大な犠牲を払っていかにか頑張ったかという調査をして、いい結果を残しています。新聞やテレビなどで取り上げられたのでご存知の方も多いと思います。私は、普段、松ちゃんと呼んでいますので、「松ちゃん、たまにはいい仕事をするね、儲からないのに」とエールを送りました。

事務局を手伝うことになったのは学会創立の翌年の2000年です。

私は2000年3月、ニッポン放送を定年退職しました。北海道の有珠山が噴火した時です。私は会社に残らず「これからは俺の人生だ」とルンルンでした。今年36歳になる次男が少年野球チームのキャプテンになったとき、お手伝いをするようになったのですが、野球に詳しくないので思い出ビデオ係として野球の試合を撮るようになりました。その日も試合を撮っていたら、廣井先生から携帯に電話がかかってきて、「信ちゃん、いま何やってんの。次期気象庁長官になる山孝さん、山本孝二さんが伊達の災対本部に入る。一緒に行かない？」ということでした。私は「いまそれどころではない」と断ったのですが、先生に押し切られて伊達に入ることになりました。

伊達に入り、廣井研究室のヒヤリング調査に協力して、避難住民が避難勧告、避難指示をどう認識しているかなどについてヒヤリングをしました。その帰りに先生から、「学会事務局を手伝ってくれない？」と頼まれました。当時の事務局長は、私と同業で2年先輩の静岡放送の川端さんでした。川端さんは定年後も会社に残って仕事を続けていたので事務局に手が回らなくて、事務局は開店

休業状態でした。「信ちゃん、暇ならやってよ」ということで事務局を担うことになりました。

ということで頑張っていたのですが、頼りの廣井先生が倒れました。

2003年6月です。大腸癌と分かりまして、9月に手術をしました。手術の結果を心配しながら飲んでいたところに「手術はうまくいった」との連絡が入り、皆で乾杯をしたことを覚えています。退院したあと、私は先生に言いました。「事務局のことは僕がやるから、先生は気にしないで治療に専念して欲しい」

「元気がになったら、災害情報を災害情報学として確立してほしい。理論構築をしてほしい」とお願いしました。

「信ちゃん、なかなかそうはいかないんだ」というようなことを言っていました。

先生は、海外の偉そうな人の論文や研究をつまんでパッチワークのようにして、自分の論文のようにするのは嫌だ、とそれはパッチワーク論文だと言っていました。地べたを這うように、被災者の話を聞いてそこから組み立てていく、いわゆる演繹法ではなくて帰納法の手法です。実際に先生はそれを実践してきたと思います。ユルゲン・ハーバーマスとかノーム・チョムスキーなどは若い時、研究したようです。先生に対していろいろ言う人がいますが、そういうことをすべて分かった上で自分の学問、研究をしていたと思います。

先生は2006年4月15日に志半ばで、残念ながら亡くなりました。ガンの手術から2年半、力尽きました。59歳でした。私は泣きました。いま廣井賞の幹事をしている岩田さんも一緒に泣きました。もちろん松ちゃんも泣きました。今回、総務委員会ができましたので、先生にお願いしたことを総務委員会が実現していただけるのかなと期待しています。

今後、どうするのと心配してくれる人が何人もいます。

一番心配しているのは妻です。現役時代と変わらず、ずーっと走り続けてきましたので、「パパはやめたらバタンキューではないか」と本当に心配しています。ただ私はやることがあります。いまのところ3つほどあります。

1つは、20年以上続けている少年野球のビデオ係です。子供が卒業するとき、それぞれの子供に思い出ビデオを作ってあげています。そのビデオはヒットやファインプレーなどいいシーンしかないのです。これまでは卒業までにあげられず、どうしても5月の連休明けぐらいになってしまいましたが、これからは卒業時に上げることができるのではと思っています。

2つ目は、10年以上続けている茨城県土浦市で一人暮

らしをしている93歳の叔母の介護です。私が4歳になるまで育ててくれた叔母です。これまでは2週間に1回、1泊2日で行っているのですが、今後は1週間に1回、老老介護ができそうです。行っても傍でパソコンで仕事をしているだけなのですが、叔母がそれでいいというので続けています。

3つ目は、1年以上前から妻と続けている毎週金曜日の国会前行動です。だんだん参加者が減ってきまして、病院と同じでジジババばかりになってきました。私たちもジジババですが、「お前と二人だけになったらどうしようか」と話をしていますが、これは意地でも続けようと思っています。

こんな話をしていると、また、廣井先生から電話がかかってきそうです。

「信ちゃん、何してるの。遊ぼうよ」と。私は「子供たちのためにやることがある。まだ、行かないよ。行く時は先生の大好きな焼酎『神の河』を持って行くから」と言おうと思っています。

ということで、長い間、ご支援いただき、感謝いたします。防災の仕事は正義の味方アンパンマンだということですので、あとはアンパンマンの皆さんにお任せして、ゆっくり休ませていただきます。これにて中村事務局は閉局します。ありがとうございました。